

平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金  
(新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業)  
分担研究報告書

子宮頸がんワクチン接種後の体調不良：2016年当科受診例のまとめ

研究分担者 楠 進 (近畿大学医学部神経内科教授)

---

研究要旨

子宮頸がんワクチン接種後に体調不良をきたした症例について、2016年における当科での診療経験をまとめた。子宮頸がんワクチン接種後の体調不良を訴える症例の症状は多様であるが、痛みがみられる頻度は高かった。またワクチン接種以前から罹患していた疾患が増悪する場合もあった。子宮頸がんワクチン接種と体調不良の関連については、疫学的検討を含めた今後の詳細な検討が必要である。

---

A. 研究目的

子宮頸がんワクチン接種後の体調不良について、2016年における当科の経験をまとめる。

B. 研究方法

子宮頸がんワクチン接種後に体調不良をきたし、2016年2月～12月に当科に紹介された5例について、臨床的特徴を検討した。(倫理面への配慮)

通常の診療の記録を後方視的に検討したものであり、倫理面の問題はないと判断した。個人情報保護には特段の配慮を行った。

C. 研究結果

患者は19歳から22歳の女性で、症状出現は子宮頸がんワクチンの3回目接種前あるいは接種後数か月以内であった。症例1は腹痛・倦怠感、症例2は両膝の関節炎と右上肢の疼痛・腫脹・熱感、症例3は頭痛と立ちくらみ、症例4は両側踵と顔面の痛みと意識消失、症例5は頭痛・微熱・皮疹・関節痛がみられた。いずれの症例も、受診時の神経学的診察では特記すべき神経学的所見はみられなかった。症例2ではCRPと血沈の軽度上昇とMRIでの両膝の関節液貯留がみられ、他院で関節リウマチに準じた治療が行われ、改善がみられている。症例4では脳波でspike & waveがみられ、幼稚園の頃にデパケンを投与されたとのことで

あった。症例5は血液検査では特記すべき所見はみられなかった。

D. 考察

症例2は関節炎をきたす何らかの炎症性の病態が考えられ、症例5も炎症性の病態の可能性もある。どちらもワクチン接種との関連は不明である。症例2はワクチン接種前からバセドウ病の既往があり、元々炎症性の病態が存在したことも考えられる。症例4の意識消失はてんかんと考えられ、ワクチン接種が原因の可能性は低いと考えられた。

E. 結論

子宮頸がんワクチン接種後の体調不良を訴える症例の症状は多様であるが、痛みがみられる頻度は高い。またワクチン接種以前から罹患していた疾患が時期的にワクチン接種後に増悪する場合もあると考えられる。子宮頸がんワクチン接種後の体調不良については、疫学的検討を含めた今後の詳細な検討が必要である。

F. 研究発表

なし

G. 知的財産権の出願・登録状況

なし